姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第38集

君田遺跡発掘調査報告書

2016

姫路市教育委員会

序

本市は、古来より播磨地域の中心として栄え、世界文化遺産・国宝姫路城に代表される歴史遺産が数多く残されています。また、播磨臨海工業地域を支える商工業都市として発展を遂げて参りました。近年では、本市の玄関口といえる姫路駅周辺の土地区画整理事業も進捗し、新しい姫路の顔が整備されつつあります。

今回、姫路駅にほど近い一画において君田遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査では、弥生時代から鎌倉時代にかけての埋蔵文化財が確認されるなど、貴重な成果をあげることができました。ここにその成果を報告し、広く公開を図るものです。本書の刊行が文化財保護の一助になることを願ってやみません。

最後になりましたが事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました関係者の皆さまに心から御礼申し上げます。

平成28年(2016年)3月31日
姫路市教育委員会
教育長　中杉　隆夫

例　　言

1．本書は兵庫県姫路市東延末236番1他に所在する君田遺跡（県遺跡番号：020455）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は建物建設に先立つもので、姫路市教育委員会が実施した。

3．発掘調査の実施ならびに本報告書の刊行に際しては、事業者である三木義隆氏に多大なご協力を頂いた。また、現地作業では栄伸工業株式会社、安西工業株式会社にご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

4．発掘調査に係る事務は姫路市教育委員会生涯学習部文化財課が行った。現地での確認調査（調査番号：20150119）は姫路市埋蔵文化財センター　小柴治子が、本発掘調査（調査番号：20150150）及び整理作業は同センター　中川猛が担当した。

5．発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等はすべて姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1．本書に使用した地図は、国土地理院発行 1/25,000 地形図「姫路南部」及び姫路市都市計画図である。

2．遺構名の表記は、掘立建物跡（SB）、溝（SD）、柱穴（SP）とした。

3．発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位は全て座標北である。標高は、東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。

4．土層注記に用いた色調は『新版　標準土色帳』（1999 年度版）に準拠している。

5．遺物の断面図示については、須恵器のみ中塗りとし、その他は白抜きのままとした。

目　　次

序

例　言・凡　例

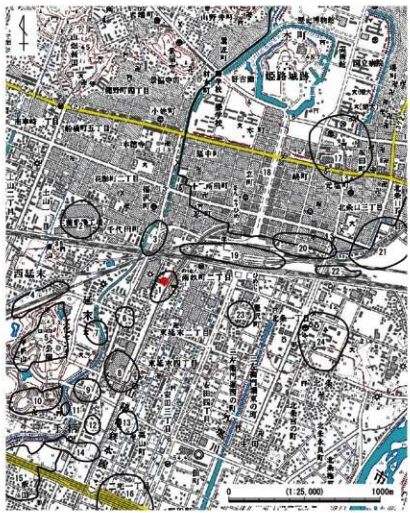
目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過……1

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境……2

第Ⅲ章　調査の結果……2

写真図版……9



1. 岩田遺跡
2. 千代田遺跡
3. 南駅町遺跡
4. 山崎遺跡
5. 手柄山北丘遺跡・群集墳
6. 村淵遺跡
7. 横跡遺跡
8. 黒表遺跡
9. 小山遺跡
10. 手柄山南丘遺跡・群集墳
11. 生矢神社裏遺跡
12. 浜田遺跡
13. 古屋敷遺跡
14. 竹の前遺跡
15. 畑田遺跡
16. 三宅遺跡
17. 本町遺跡
18. 姫路城城下町跡
19. 豆腐町遺跡
20. 駅前町遺跡
21. 神屋町遺跡
22. 朝日町遺跡
23. 豊沢遺跡
24. 北条遺跡

図1　調査地の位置

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯と体制

姫路市東延末236番1他において鉄骨造の建設工事が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である君田遺跡に含まれている。

事業者より文化財保護法第93条に基づく届出が提出されたことから、協議を開始した。計画建物の基礎が遺構面に達する深度であることから遺跡の包蔵状況を確認するために敷地内に3箇所調査区を設定し、確認調査を実施した。調査の結果、２箇所の調査区から遺構・遺物が確認された。

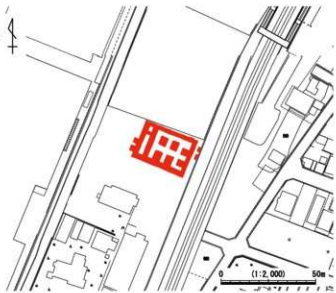


図２　調査区配置図

確認調査の結果、計画地に遺構が存在することが判明したため、兵庫県教育委員会からの発掘調査の通知に基づいて工事の掘削により遺跡が破壊される、建物基礎及び梁部分を対象とし、事業者と姫路市で委託契約を締結し、現地における本発掘調査を開始した。

現地調査開始から整理作業終了までの体制は、以下のとおりである。

教育委員会事務局	教　育　長	中杉隆夫	埋蔵文化財センター	館　　長	秋枝　芳
	教育次長	八木　優		係　　長	岡崎政俊
	生涯学習部長	植原正則		係　　長	森　恒裕
	文化財課長	花輪和宏		主　　事	小林啓祐
	係　　長	大谷輝彦		技術主任	小柴治子
	技術主任	南　憲和		技術主任	中川　猛

調査の経過

調査面積は358㎡である。調査区の呼称は、独立した基礎部分のみT1～T4とし、その他の部分については全体を一つの調査区とした。必要に応じて調査区北部等、方位を付して呼称する。調査は、平成27年７月14日から開始した。重機掘削完了後、人力により遺構検出を行った。東側のT1・T2から順に機械掘削と並行して西側へ進め、22日に全ての調査区の機械掘削が完了した。検出した遺構の調査を進めながら完了した調査区から順次、記録撮影・図面の作成を行った。27日からは、調査の完了した東側を事業者に開放し、埋め戻しが進む中で西側部分の調査を行い、29日に現地調査を完了した。現地調査完了後、出土品の整理作業を行い、本書の刊行をもって終了した。

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

遺跡の立地　遺跡は兵庫県姫路市東延末字君田に所在する。姫路市は近畿地方の西部、兵庫県の南西部に位置し、旧国では播磨国にあたる。市域の北側には中国山地から続く播但山地、西播山地があり、それらを開析して揖保川、夢前川、市川が南の播磨灘へと流れ込む。これらの河川の堆積作用により下流域には沖積平野（姫路平野）が形成されている。遺跡は姫路平野の中央付近、JR姫路駅の西約500mに位置し、船場川の形成した微高地上に立地している。現地表の標高は概ね10mである。

周辺の遺跡　遺跡西方を流れる船場川の流域には、北から千代田遺跡、橘諸遺跡、黒表遺跡、小山遺跡、畑田遺跡など、市内を代表する弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が集中している。これらの遺跡の背後にある手柄山は『播磨国風土記』に記載の「手苅丘」に比定されている。開発により大きく改変されているが、丘陵上には手柄山北丘群集墳や南丘群集墳、弥生時代後期の竪穴住居が見つかった手柄山北丘遺跡などが存在していた。このように君田遺跡周辺の船場川・手柄山一帯は市内でも濃密に遺跡が存在する地域といえる。また近年では、遺跡の東方に所在する豊沢遺跡において調査が行われ、これまであまり実態が判明していなかった弥生時代の集落の一端が明らかになりつつある（姫路市教委2013・2014）。

その後、奈良時代には遺跡の所在する播磨国飾磨郡に播磨国府が置かれたことが、『和名類聚抄』の記述から知られる。国庁の所在等は現時点では不明であるものの、遺跡北東に存在する本町遺跡や豆腐町遺跡が播磨国府に関連する遺跡と考えられる。平安時代後半になると姫路平野には、飾磨郡の条里地割に沿った集落が出現する。遺跡の周辺では畑田遺跡や姫路城城下町跡の下層、駅前町遺跡などで当該時期の遺構が確認されている。

第Ⅲ章　調査の結果

基本的な層序　基本的な層序は、盛土、Ⅰ層　耕土、Ⅱ層　10YR4/3にぶい黄褐色細砂（床土）、Ⅲ層　10YR4/2灰黄褐色細砂、Ⅳ層　10YR4/3にぶい黄褐色細砂、Ⅴ層　10YR3/2黒褐色シルト、Ⅵ層10YR5/4にぶい黄褐色（地山）、Ⅶ層　砂礫である。堆積は調査区全体で均一ではなく、西側ではⅦ層が高まり、東側にかけてⅤ層の堆積が徐々に厚くなり、南東部において最も厚くなっている。このことから調査区の西側が微高地で、南東部にかけて地形が下がっていると想定される。遺構は基本的にⅥ層上面で検出し、南東部においてはⅤ層上面で検出した。

検出した遺構と遺物　溝、掘立柱建物跡、ピット等である。時期は弥生時代と中世である。

SD01　調査区の北部から西部において検出した。Ⅵ層を掘り込む。中間部分が未調査部分にあるため北部と西部の溝が一連の遺構であるかどうかについては断言できないが、溝の形状・深さから同一遺構と認識した。溝は、L-L'断面附近で上幅約1.4mとやや広がるが、K-K'断面では上幅約1.1m、下幅約0.5mで基本的には箱形を呈する。深さは、遺構検出面から最大で90cmを測る。溝底のレベルはK-K'で8.5m、M-M'断面で8.4mを測り、西側がやや深い。溝内から遺物はほとんど出土せず、

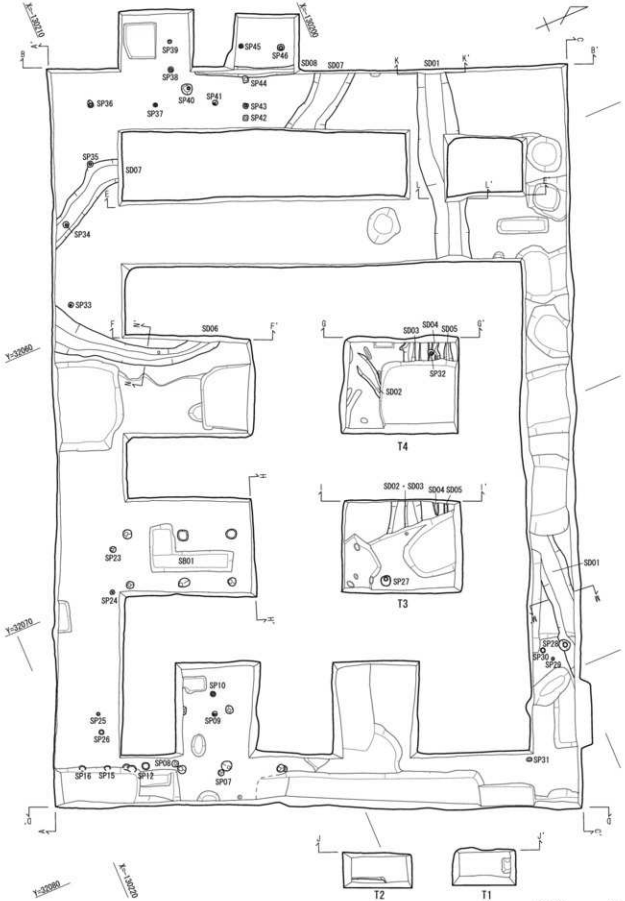

X=138010
X=138000
Y=32060
Y=32070
Y=32080
X=138020
SP39
SP45
SP46
SP38
SP44
SP36
SP40
SP41
SP37
SP43
SP42
SD08
SD07
SD01
SP35
SD07
SP34
SP33
SD06
SD03
SD04
SD05
SP32
SD02
T4
SD02
SD03
SD04
SD05
SB01
SP23
SP24
SP27
T3
SD01
SP28
SP30
SP29
SP10
SP25
SP26
SP09
SP16
SP15
SP12
SP08
SP07
SP31
T2
T1
0
(1:150)
5m

図３　調査区平面図

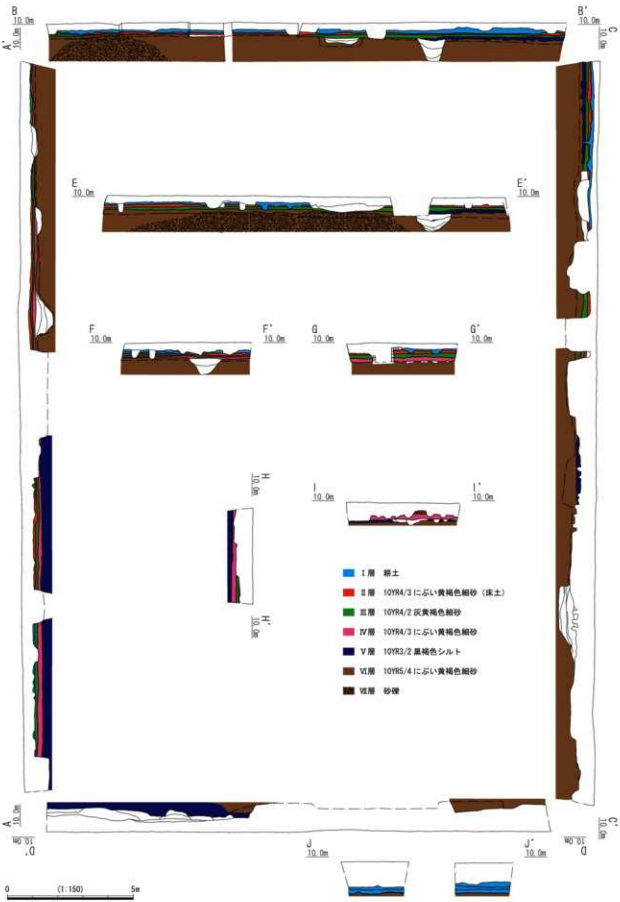

B
10.0m
B'
10.0m
A'
10.0m
C
10.0m
E
10.0m
E'
10.0m
F
10.0m
F'
10.0m
G
10.0m
G'
10.0m
H
10.0m
H'
10.0m
I
10.0m
I'
10.0m
A
10.0m
D'
10.0m
C'
10.0m
D
10.0m
J
10.0m
J'
10.0m
I層 耕土
II層 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂（床土）
III層 10YR4/2 灰黄褐色細砂
IV層 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
V層 10YR3/2 黒褐色シルト
VI層 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂
VII層 砂礫
0
(1:150)
5m

図４　調査区断面図

L－L'断面において、溝の上層からわずかに出土した。1は壺の胴部である。残存幅13.15cm、残存高8.8cmを測る。赤褐色を呈し、胴部外面に刷毛目調整後、櫛描文を施す。

SD02～SD05　T3及びT4で検出した。埋土はいずれも10YR4/1褐灰色シルトで、V層を掘り込む。調査区の大部分が撹乱を受けているため、詳細は明らかではないが、いずれの溝もT3からT4へとつながるものと想定する。T4で検出したSD03が検出時では最も幅広く上幅で1mを測る。深さは遺構検出面から最大で0.1m。溝の下部は2条に分かれた。SD02は最大幅で約0.6mを測るが、南壁附近で上面が削平されている。T3において溝の切り合いが認められた。検出した位置からSD02とSD03の切り合いと考えられるが、埋土が類似しているため、調査範囲内では溝の切り合い関係は明らかにしがたい。遺物が出土していないため時期の詳細は不明であるが、SD02を除き後述するSB01と軸方向が近いことから何らかの関連がうかがえる。

SD06　調査区南部の中央付近で検出した。V層を掘り込む。N－N'断面では、上幅0.64m、下幅0.24m、深さは遺構検出面から0.5mを測る。調査区外に延びるものと想定できるが、その延長はいずれの調査箇所においても検出できなかった。遺物は少なく、図化に耐えうるのは、**2**・**3**のみである。**2**は溝の上層から出土した。**3**は溝の中層から出土した。**2**は甕の底部である。底径6.05cm、残存高4.85cmを測る。外面調整は刷毛目を施す。**3**は高杯、中実の脚部である。最大径は7.4cm、残存高は8.45cmを測る。いずれも胎土に砂粒を多く含み、色調も灰白色を呈している。

SD07　調査区西部及び南部で検出した。VI層を掘り込む。中間部分が未調査部分にあるため一連の溝であるかどうかについては断言できないが、溝の形状・深さから同一遺構と認識した。西壁附近で上幅1.5m、下幅1.1m、深さは遺構検出面から0.2mを測る。比較的浅い溝である。遺物はいずれも少ないが、埋土中から**4**が、西部の溝底からわずかに浮いた状態で**5**及び**6**が出土した。**4**は甕の口縁部である。残存高3.3cmを測る。口縁端部に刻目を施し、胴部に櫛描沈線を施す。**5**は壺で、口縁部を欠損するが、胴部下半は完存している。底径は6.6cm、残存高は15.8cmを測る。胴部下半には刷毛目が良好に残存している。**6**は甕である。口縁部の大半を欠損しているが、概ね全容が把握できる。復元口径は16.6cm、器高は22.1cm、底径は4.65cmを測る。最大径は胴部上半にあり約16.8cmを測る。口縁部はわずかに外反しながら外側へ延びる。**5**及び**6**については、類似資料が辻井遺跡N６から出土しており、弥生時代中期前半に位置付けられる（大手前大学史学研究所2007）。

SD08　SD07の南側で検出した。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色細砂で、後述するSB01の埋土に近い。上幅は最大で0.4m、深さは遺構検出面から0.1mを測る。溝の軸は飾磨郡条里に近く遺物は出土していないが、SB01と同時期と考える。

SB01　調査区東部で検出した。V層を掘り込み、未調査部分を含むため本来の規模は明らかにできないが、3間×4間以上と想定できる。建物の主軸はN21°Eで飾磨郡の条里地割に沿う。梁行の柱間は概ね2.0m前後であるが、桁行はSP02-04間で2.3m、SP17-19間で2.0mを測る。SP04-SP17間は5.0mを測ることから未調査部分に柱穴があるとすれば、その柱間寸法は概ね2.5mとなる。未掘であるため2棟分という可能性もあるが、ここでは1棟分として理解しておく。**7**はSP01から出土した土師器皿である。手づくね成形で口径は8.0cm、器高は1.6cmを測る。**8**はSP02から出土した瓦器椀の底部である。

底径は3.9cm、残存高は2.35cmを測る。内面見込みには平行に暗文が施される。残存している部分に炭素の吸着はほとんどなく、色調は灰白色を呈している。**9**はSP04から出土した須恵器椀の口縁部である。**10**はSP21から出土した平瓦である。残存長9.45cmを測る。焼成は堅緻で凸面に格子叩き、凹面に布目が認められる。これらの遺物からSB01は概ね12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる。

SP　調査区において建物等に伴わないピットを32基検出した。いずれも遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。そのうちSP13・15・16、SP42・44については埋土から近現代のピットの可能性が高い。その他のピットについては、SB01を構成する柱穴の埋土と類似しており、同一時期の所産の可能性が高い。厳密ではないものの埋土から弥生時代と積極的に判断できるピットはなかった。

その他　T1及びT2では、現地表から約1.2mでⅥ層を確認した。調査区東部のⅥ層検出の深さが現地表面から約0.7mであるのに比べて著しく深くなっている。Ⅵ層上面まで耕土が堆積している点とT2において掘り込みの肩が検出できことから、T1とT2は人為的に掘り込まれた深田等に該当している可能性が考えられる。

総　括　君田遺跡ではこれまで兵庫県教育委員会による確認調査以外、遺構が確認されていなかった。調査区の西側にある敷地においても確認調査を実施しているが、にぶい黄褐色の地山（Ⅵ層）は確認できるものの、大規模な撹乱を受けている箇所も多く、遺構・遺物は確認できていなかった。そのため遺構の広がりは今一つ明らかでなかった。そうした中で、今回の調査において弥生時代中期前半の遺物を伴う溝等を確認した。同時期の建物跡等は検出できなかったが、君田遺跡における遺構の広がりの一端を押さえることができたといえる。

掘立柱建物跡SB01は、飾磨郡の条里地割に沿っている。1棟のみの検出ではあるが、条里地割に沿った建物は、遺跡の南方にある畑田遺跡でも見つかっているように、姫路平野における中世前期の集落内における典型的な在り方といえよう（姫路市教委2015）。今回の調査成果から君田遺跡においても調査区外を含めて中世前期の集落が広がっていることが予想できる。

参考文献

大手前大学史学研究所　2007　『弥生土器集成と編年－播磨編－』六一書房

中世土器研究会　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

姫路市教育委員会　2013　『豊沢遺跡第4次発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第9集

2015　『竹の前遺跡・畑田遺跡発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第24集

2015　『豊沢遺跡第7次発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第25集

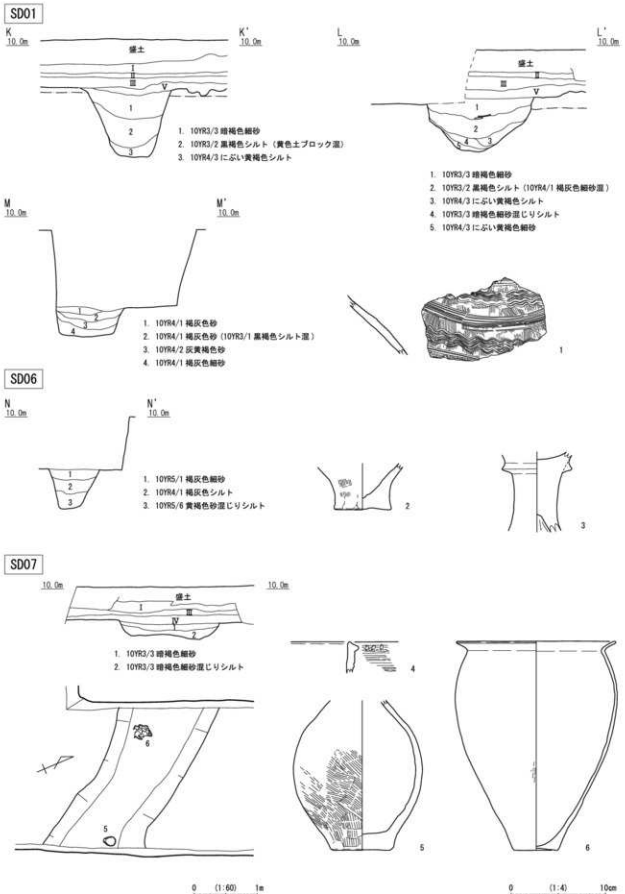


図 5　SD01・SD06・SD07 断面及び出土遺物実測図

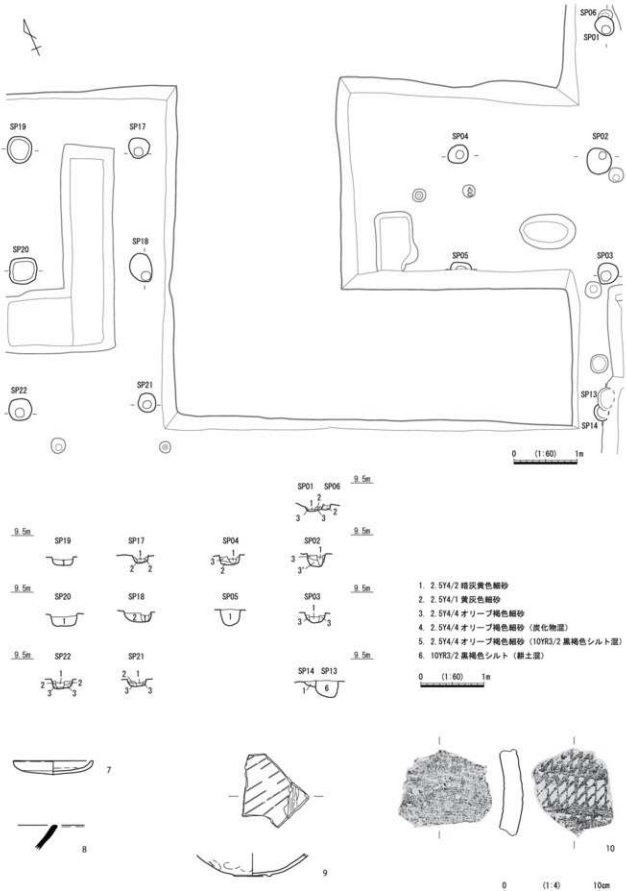


図 6　SB01 平・断面図及び出土遺物実測図

写真図版 1

調査区より姫路駅方面を望む（南西から）

A-A' 土層断面 東端（北西から）

調査区北部 全景（東から）

調査区西部 全景（南から）

調査区西部 SD01（東から）

SD01 K-K' 土層断面（東から）

調査区北部　SD01（西から）

SD01 M-M'土層断面（西から）

SD06（北から）

SD06 N-N'断面（北から）

調査区西部　SD07（西から）

SD07 土器5出土状況

SD07 土器6出土状況

写真図版 3

T1 全景（南から）

T2 全景（南から）

T3 全景（北から）

T4 全景（東から）

SB01（南から）

1

2

3

4

5

6

7

9

8

10

報告書抄録

ふりがな	きみだいせき
書名	君田遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告第38集
編著者名	中川　猛
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671－0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番1　TEL(079)252-3950
発行機関	姫路市教育委員会
所在地	〒670－8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地　TEL(079)221-2787
発行年月日	2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
君田遺跡 きみだいせき	兵庫県姫路市 ひょうごけんひめじし 東延末236番1 ひがしのぶすえ ほか	28201	020455	34度 49分 32秒	134度 41分 01秒	2015.7.14 ～ 7.29	358 ㎡	建物建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
君田遺跡	集落	弥生時代 平安時代 鎌倉時代	溝 掘立柱建物	弥生土器 須恵器・土師器・瓦器	

要約

弥生時代中期前半の溝を確認した。集落に直接関係する遺構は確認できなかったが、近辺に集落の存在が予想される。その後、中世段階になって条里地割に沿った掘立柱建物跡が検出された。

君田遺跡発掘調査報告書

平成28年(2016年)3月31日　発行

編集　姫路市埋蔵文化財センター　〒671－0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252－3950

発行　姫路市教育委員会　〒670－8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地
TEL(079)221－2787

印刷・製本　内海印刷株式会社　〒670－0808　兵庫県姫路市白国五丁目12－41